

2024 年度

国府台女子学院 中学部

第2回入試

国 語 (50 分)

【注 意】

1. この問題は、「始め」の合図があるまで開いてはいけません。
2. 問題を読むときに、声を出してはいけません。
3. 印刷が不鮮明ふせんめいでわからない場合や、その他わからないことがあった場合には、
だまって手をあげ、先生にたずねてください。
4. 答えは、すべて解答用紙に記入してください。

注意Ⅱ句読点や記号もそれぞれ一字と数えます。

(室生犀星「動物詩集」より)

□ 次の各問題に答えなさい。

問一 次の——線部のカタカナは漢字に直し、漢字の読みはひらがなで答えなさい。

- ① 社交ジレイを真に受ける。
- ② 運動部に入部してシンシンをきたえる。
- ③ 学校はキヨウチヨウセイを育む場だ。
- ④ 家族が無病息災であるように願う。
- ⑤ 功德を積む。

問二 次の詩中の□にあてはまる生き物をひらがなで答えなさい。(出題の都合上本文の仮名遣いを直しています。)

□はむつかしい顔をしている。
にがりきつている。
すこし きびしいような顔です。
からだがつしりしていて、
尾もひれも
ぴんとしているからえらそうに見える。
お祝の日にさっそく出て来て、
いばりかえってお皿の上でねている。
□のかわりになるようなさかなはいない。
だから 昔から□は
そりかえって いばっている。

いまに 頭と尾とがひつついてしまうでしょう。

問三 次のア～エの文のうち、「せいぜい」の使い方が適切ではないものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 自分なりにせいぜい勉強していきたい。
- イ 毎回、集会に来るのはせいぜい三人ぐらいだ。
- ウ 悩みごとがあつて昨日からせいぜい食べていない。
- エ クラスをあげてせいぜい彼を応援するつもりだ。

問四 他人の家族を敬って表現するとき用いる漢字を次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 成 イ 令 ウ 礼 エ 祖

問五 他者を敬って呼ぶのに使う表記として、次の□に共通してあてはまる漢字一字を答えなさい。

- 女 □殿 □公 □人

問六 次の三字熟語の空欄に当てはまる漢字一字を答えなさい。

試金□・・・物や人の真価を見極めるための試み。

問七 次のうち正しい表現はどちらですか。記号で答えなさい。

小高い丘から（ア 暮れなずんできた イ 暮れなずむ）町を見下ろす。

問八 次のア～エの神話や昔話のうち、関東地方に由来するものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 八岐大蛇 イ 金太郎 ウ 桃太郎 エ 因幡の白兔

問九 「寸分の狂いもない（少しの狂いもない）」、「寸評（ごく短い批評）」という言葉があります。これらの言葉から「寸」の意味を想像し「○○か」と読む場合、○の中にはどんな言葉が入りますか。○ひとつにつきひらがな一字で答えなさい。

問十 次のア～エの語のあとに共通して続く三字の語をひらがなで答えなさい。

ア 重力がく イ 音楽がく ウ 雲がく エ 手間がく

問十一 「のべつ幕なし」という言葉を使って二十字以上三十字以内で短文を作りなさい。話を通じれば主語がなくてもかまいません。

〔三〕 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

「ねえ、浦さん」

「ん、なんだ」

「金さんに、子どもはいないの？」

「おう？」浦さんは、突然の質問に驚いたようだった。「なんでだ？」

われながら、ばかなことを聞いたものだと思ったが、思い切つてこういった。

「お父さんに、聞いたんだけど……。満州つてところに、金さんの奥さんと子どもがいるって……」

浦さんは、一瞬、険しい顔になったが、すぐに、ほほ笑んだ。

「坊、満州つて知ってるか？」

「ううん。中国のことつて聞いただけ」

「そうか、なんといつていいかなあ。戦時中のことだからな」

「いえ、いいです」僕は、聞いてはいけなことを聞いてしまったような気がして、そういった。

「いいことはない。いいことはないんだ」浦さんは、そういつて話し出した。

「坊、戦争があつたつてことは、知ってるな」

「うん、昔のことでしょ」

「昔といつてもな、お前のおやじが、お前くらいのときだから、そんなに昔でもないんだぞ。日本は、中国を占領してな、満州つて国をつくろうとしたんだ。それで、たくさんの兵隊が満州へ渡つてな、そりゃあ、ひどいことをしたんだ」

「金さんは、兵隊じゃなかつたんでしょ」

「ああ、金作は、開拓団として満州へ渡つたんだ。日本に住んでも、満足に飯も食えないころだったからな。生まれた土地を捨てて、むこうでひと旗

上げようと、思ったんだよ。でもな、むこうも、もつとひどかったらしい。朝から晩まで鍬を振りつづけて、荒れた土地をタガヤすんだ。本当に、日が昇ってから、日が沈むまでだ。金作はな、夢見て出かけた満州で、毎日毎日、そんな暮らしをしていたんだよ」

「想像つかないや」

「そりゃ、そうさ。俺にだって、想像つかない。金作は、あまり、しゃべりたがらないからな。しかし、金作は、苦勞の果てに、一軒のあばら屋を手に入れ、女房をもらったらしい」

「結婚して、子どもができたんだ」

「でもな……」

「どうしたの？」

「敗戦と同時に、すべてが終わりになったのさ」

「えっ、どういうこと？」

「どういったら、いいのかな……」それは、とても、いいにくいことらしく、浦さんが、ことばを選んでいるのがよくわかった。「坊、戦争つてのは、家を焼いたり、人を殺したりするもんだと習ったろう」

「うん」僕は、ゆっくりとうなずいた。

「そうなんだ。本当にそのとおりなんだ。金作は、北から下る兵隊に、家を焼かれ追われたんだ」浦さんはそういうと、強ばる表情を解きほぐすかのよう、釣竿に手をかけて、立ち上がった。

(金さんの奥さんと、子どもは、殺されてしまったの?)僕は、そう聞きかけて、口をつぐんだ。

浦さんは、ふうっと息を吐いて、ふたたび座ると、

「金作はな、生き別れになっちゃまったんだ。仕方がないのさ、あの敗戦のごたごたの中で、満州に残れば、やつ自身、殺されていたかもしれないんだ。

金作は、そのことを後悔しているようだが、一人で帰ってきた金作を、だれも責められないって」と、いった。

僕の頭の中には、金さんの、あのやさしそうな顔が浮かび上がった。それは今、浦さんに聞いた事実からは、想像のつかない笑顔だった。

「金作はな、子どもにやさしいだろ」

「うん」

「敗戦後、俺と二人で、住んでいたころもそうだった」

「お父さんだね」

「ああ、聞いたか。お前のおやじがちょうど、お前ぐらいの歳だったな。おかしなもんだ」

「お父さんに聞いたよ。金さんも浦さんもよく遊んでくれたって」

「そうだったな。でも、金作のやつは、そのたびに、夜中になると布団の中で泣いていたよ」

浦さんの声が、途切れた。僕はなにもいえず、竿先だけを見つめた。

「坊、悪かったな。変な話を聞かせて」

「ううん」

「だれかに、話したかったのかもしれないな。俺自身が」浦さんは、確かめるように、そういった。

「浦さん。ザリガニのエサは、だめだねえ」僕は、わざと

「そうかな」浦さんは、笑ってこたえてくれた。しかし、その目は、まだ、竿先を見つめたままだった。

「僕さあ、いつもみたいに、小ブナで釣ってみるよ」

「小ブナでか？」

「うん。むこうで、小ブナ釣ってくるよ」僕は、そういうと、フナ釣りの道具を手にしち上がった。

いつものように、支流の家下川の手前までくると、僕は、釣竿を伸ばして振りかえった。岬の先には、浦さんの背中が、小さく見えた。フイにひとかたまりの風が、僕のうしろから浦さんのいる岬の先へざあつと音を立てて走った。すると、浦さんは、思い出したように振りかえり、小さく手を上げた。僕は、釣竿を差し上げて返事をする、家下川の流れにむかっただ。

対岸に生い茂るネコヤナギが、風をうけて柔らかに揺れている。青々としたその茂みから、瑠璃色の光が一直線に飛び出した。

(あつ、カワセミだ)

カワセミは、僕の目の前を横切ると、桑畑のほうへ旋回していった。僕は、その姿を見えなくなるまで目で追うと、もう一度、家下川に目を移した。

そのときである。信じられないことが起った。いや、信じられないものを見てしまった。

ネコヤナギの手前の、いつも小ブナを釣るその流れの中に、黒く大きな魚の影を見つけたのだ。大きいといっても、五十センチや六十センチじゃない。一メートル、いや、それ以上だ。

一瞬、自分の目を疑った。

しかし、それは、あきらかに魚で、一メートル五十センチ、僕の身長ほどの大きさなのだ。息が、止まりそうだった。足が、がくがくと震えた。

しかし、その大魚は、モの際にばかりと背中をさらすようにして浮かび、動こうとしなかった。黒い魚体には、鱗の模様が、はっきりと見える。虚ろそうな目が、どこを見てもなく開かれている。僕の、手のひらよりはるかに大きな鱗が、ゆらゆら揺れている。なんなんだろう。なんで、こんな化物のような魚がいるのだろう。今、僕の目の前にいるこの魚を、だれが信じてくれるというのだ。

(そうだ。浦さんに知らせなくては)

僕は、そこに浮かぶ大きな魚に、
(頼むから、そこから動くなよ。じっとしているよ) とうとうと、静かに後ずさりして、岬の先端に走った。

「浦さん、たいへんだ」

「どうした、坊」

「こんな、でっかい魚がいるんだ」

「はははっ。おおげさだなあ」

「そうじゃないって、本当なんだって」

僕は、あわててしまい、うまく説明できない自分もどかしかった。しかし、浦さんは、僕のただならぬ様子を察して、すぐに立ち上がると、僕のとについて駆けだした。土手を駆けあがり、家下川の手前になると、僕は腰を低く折った。そして、**A**、魚の見える位置まで近寄った。

「浦さん、あそこだよ。あの、ネコヤナギの手前」

(**④**神様……)と、お願いしたい心境だった。自分で、川をのぞく勇気がなかった。

浦さんは、ゆつくりと立ち上がると、家下川の流れをのぞいた。僕は、浦さんの表情を目で追った。浦さんの目玉は、流れの中を**⑤**ように見ていたが、一瞬、視線が定まると、大きく見開かれた。その表情は、しばらくの間、動くことはなかった。

「坊」

「いるでしょ」

「ああ、とんでもない代物だぜ」浦さんは、かみしめるようにいった。

僕も、川をのぞき込んだ。

(いた)

さっきと同じ場所に、同じカッコウで、やつは横たわっていた。

「大きいでしょ」

「ああ、五尺はある。おまえより、でかいぞ」

「鯉かな」

「鯉に似ているが、鯉じゃない」

「じゃあ、なに？」

「草魚だ」

「そうぎよ？」

浦さんは、黙ってうなずいた。

と、そのときである。

さつきまで、じっとしていたその草魚が、動き出した。モの際から、**B**流れの中に進み出ると、突然、がほん、と反転をした。波紋は大きく、子どもが飛び込んだかと思うほどだった。草魚は、下流の深みにむけて一直線に進んだ。そのものすごい勢いで、川底の泥が**C**沸き上がった。

一瞬の出来事だった。

僕も、浦さんもポカンと口を開けたまま、草魚の消えていった流れのほうを、いつまでも眺めていた。

「でかかったなあ」

「うん、大きかった。魚じゃあないみたいだったよ」

「そうだな。でも、魚さ」

「うん」

「満州の魚だ」

「えっ、満州の？」

「このことは、だれにもいうな。金作以外のだれにもな」

「秘密なの」

「ああ、俺たち三人で釣るまでな」

あの化け物のような魚を釣るなんて、想像のできないことだった。しばらく

く、僕は、そこに突っ立ったまま、黙り込んだ浦さんの横顔を見つめていた。

草魚（そうぎよ）

原産地はアジア大陸東部。体長は一メートル以上、体重は十六キログラムにも及ぶ。産卵期は、六月から七月の増水時期。卵は、川底をころがり、流されながら孵化するので、長い川でしか繁殖できない。その名の通り、草食性でアシやマコモを好み、一日当たり自分の体重の1・5倍も摂食する。日本では、四十年前に中国・揚子江産のものを全国の川に移殖したが、天然繁殖したのは利根川だけである。

僕は、魚類図鑑や事典をお父さんの部屋から引きずり出し、草魚のことを調べまくった。どの本にも、草魚は載っており、その内容はどれも同じようなものだった。

浦さんのいうとおり、草魚は草を食べる魚で、中国から来たらしい。しかし、日本では、関東の利根川にしかないはずの草魚が、どうして愛知県の矢作川にいるのだ。ここのところだけが、納得がいかなかった。

次の日、僕は、浦さんとの約束どおり金さんの家に出かけた。

「あの草魚を、俺たち三人で釣る」浦さんのその計画を実行するための、作戦会議のためである。

金さんの家につくと、浦さんはもう来ているようだった。勝手口が開き、二人の声が漏れていた。

「本当だぞ、金作。まちがいない、草魚なんだ」

「あの川にね？」

「それも、五尺はありそうな大物さ」

「そりゃ、浦さんが魚を見まちがえるわけはないからね、信じようとは思うよ。でもね、五尺となるとね」金さんは、どうやら疑っているようだった。

僕は、勝手口から飛び込み、

「本当だよ、金さん。大きいんだ。こんなに大きいんだ」と、興奮した声で叫んでしまった。

金さんは、突然の大声に一瞬驚いたようだが、両手をいっぱい広げた僕を見て笑った。

「いいよ、いいよ。拓ちゃん。拓ちゃんと浦さんがいうんだから、まちがいないよ、信じているよ」

(中略)

「ねえ、浦さん。あいつ、釣れるかな」

「釣りたくないか？」

「ううん。そりゃあ、釣りたいよ」

「じゃあ、釣れるさ。釣りたいと心から思えば、魚はいつか釣れてくる。魚釣りなんて、そんなもんだ」浦さんは、僕の目をじっと見ていった。

すると、今度は金さんがいった。

「拓ちゃん。浦さん、ああいつてるけれど、本当は自信たっぷりなのよ。そのテーブルの上を見てよ」

金さんの指さすテーブルの上には、四つ折りになったタオルが置いてあった。

「なあに、これ」

「開いてごらんよ」

⑧ 金さんと浦さんは、ニヤニヤしながら僕を見た。僕は、ゆっくりと、その包みを開いた。

「うわっ。でっかいや」

タオルの中からは、大きな釣針が一つ出てきた。固い金属製の釣針は、ちょ

うど裸電球くらいの曲がりかげんで、その先は鋭くがっていた。

「す、すごいね、この針。浦さんがつくったの？」

浦さんは黙ったまま、にやりと笑った。

「拓ちゃん。浦さんはね、金さんの大事なテンプラ用の金箸で、その針をつくったのよ。おかげで、金さんテンプラつくれないよ」

金さんのおどけた顔を見て、僕たちは笑った。

(中略)

「それでさ、エサはなにを使うの？」

「エサか、坊は、なんだと思う」

「それがね、エサだけは想像できないんだよ。草を食べる魚だから、植物だとは思うけど、本当に草で釣れるのかなあ？」

「どうかな？」

「ねえ、教えてよ。なんで釣るの？」

「……正直いうと、俺にもまだ、わからん。だから、金作の庭から適当にもつていこうと思っとる」

「庭から？」

「ああ、キュウリとか、ホウレン草とか」

僕は、驚いた。草魚を釣るのに、野菜を使うとは思ってもいなかったからだ。

「同じ草でも、人間が食べてうまいものは、魚が食べてもうまいと思うにちがいないさ」浦さんは、少し笑いながらそういった。

すると、今度は、金さんがいった。

「それなら、チンゲン菜がいいよ。チンゲン菜なら、中国の野菜だから、草魚もきつと好きだと思っよ」

「そりゃあいい」

金さんのアイデアに、みんなで笑った。おなかを抱えて笑った。

「でも、拓ちゃん。信じられる？　こんなでつかい釣針を、魚が呑み込むのかね」金さんは、手にした釣針を、じろじろ眺めながらいった。

大きな釣針が、蛍光灯の光をうけて、きらきらと光った。

「だいじょうぶだ、金作。かならず、釣ってやる」黙っていた浦さんが、口を開いた。

(えっ、釣ってやる？) 僕は、不思議に思った。(浦さんは、金さんのために草魚を釣ろうというのか。どうということなんだろう)

金さんは、黙ったまま、しばらく釣針を眺めていたが、やがて、ぽつりとこういった。

「浦さんのいうとおり、本当に釣れるといいね。満州の草魚に、もう一度会えたらいいね」

浦さんは、黙ってうなずいた。

僕は、きらきら光る釣針を、いつまでも、見つめていた。

(阿部夏丸『泣けない魚たち』 講談社)

問一 〓 線部 a～d のカタカナを漢字に、漢字はひらがなに直して答えなさい。

問二 〓 線部 ①「金作のやつは、そのたびに、夜中になると布団の中で泣いていたよ」とありますが、それはなぜですか。その理由としてもっともふさわしいものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 見知らぬ子どもに優しくして満州に子どもを残してきた罪を償おう
- として自分の浅ましさに失望しているから。

イ 敗戦の混乱の中にある満州に自分の子どもを残してきたことを何年経った今でも後悔し続けているから。

ウ 満州に残してきた自分の子どもや妻が殺されてしまったことを思い返して悲しみに暮れているから。

エ 自分子どもと同年代の子と関わりを忘れていた満州の家族のことを思い出してしまふから。

問三 文中の ② にあてはまる言葉としてもっともふさわしいものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア むくれて
- イ あきれて
- ウ うなだれて
- エ おどけて

問四 〓 線部 ③「足が、がくがくと震えた」とありますが、この時の「僕」の気持ちとして考えられるものを次から全て選び、記号で答えなさい。

- ア 怒り
- イ 失望
- ウ 諦め
- エ 驚き
- オ 後悔
- カ 恐れ

問五 文中の A C にあてはまる言葉としてふさわしいものを次のア～エからそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

- A ア よろよろ
- イ ずんずんと
- ウ ばたばたと
- エ じりじりと
- B ア ごそごそと
- イ ごろごろと
- ウ ゆらゆらと
- エ ひしひしと

C

- ア ぐらぐらと イ もくもくと
ウ ぶすぶすと エ ところと

問六 — 線部④「(神様……)」と、お願いしたい心境だった」とありますが、「僕」はどのようなことを願っていたのですか。十字以上十五字以内で答えなさい。

問七 文中の⑤にあてはまる動作としてもっともふさわしいものを次のア～エから一つ選び、答えなさい。

- ア すべる イ ほる ウ なめる エ さす

問八 — 線部⑥「ポカンと口を開けたまま」とありますが、この様子を表す、次の慣用句の空欄にあてはまる言葉をひらがな三字で答えなさい。

□にとられる

問九 — 線部⑦「黙り込んだ浦さん」とありますが、この時浦さんが考えているだろうこととしてふさわしくないものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 巨大な草魚を釣るためにはどうしたらよいだろうか。
イ 金さんのためになんとか草魚を釣れないだろうか。
ウ 三人ならば大きな草魚を釣れるのではないか。
エ こんなに大きな草魚は釣れないのではないか。

問十 — 線部⑧「金さんと浦さんは、ニヤニヤしながら僕を見た」とありますが、その理由としてもっともふさわしいものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自作の大きな釣り針を見て「僕」が予想外の反応をするのが楽しみだったから。

イ タオルの中身がわからない「僕」が中身を見た途端におびえるだろうと予想したから。

ウ 釣り針を見た「僕」が自分たちの期待通りに驚いてくれるはずだと思っていたから。

エ 今まで作ってきた釣り針の中で最もよくできたものだったので「僕」に自慢したかったから。

問十一 — 線部⑨「浦さんは、金さんのために草魚を釣ろうというのか」とありますが、浦さんはなぜ金さんのために草魚を釣ろうとしているのですか。その理由としてもっともふさわしいものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 三人で草魚を釣り上げれば仲間としての絆が深まり、満州に残した家族を思う金さんの苦しみを和らげられると思っているから。

イ 満州は金さんの大好きな土地であり、そこに住む草魚を釣ることによって金さんに喜んでもらいたいと思っているから。

ウ 金さんは満州に生息する草魚に深い愛着をもち、再び目にするのを切望していたのでなんとか釣ってあげたいと思っているから。

エ 満州に家族を残して帰国したことを心残りに思っているだろう金さんのために、そこに縁のある魚を釣ってあげたいと思っているから。

問十二 この文章の表現の特徴と効果としてもっともふさわしいものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「ざあっ」「がぼん」など風や生き物が立てる音に擬音語を多用することのでいきいきとした情景が読者に伝わる。

イ 他者に発信できない「僕」の心の声を（ ）内に入れて読者に伝えることで内気で控え目な僕の人柄を表している。

ウ 草魚を知らない読者のために本文中に事典などの引用で説明を入れることで読者を物語に没入させようとしている。

エ 「僕」の金さんや浦さんに接する態度から言葉にせずとも理解しあえる相互の強い信頼関係が読みとれる。

